新英文法選書

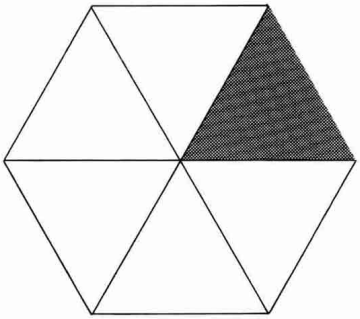
太田　朗
梶田　優　責任編集

第1巻

文法と発音

水光雅則著

大修館書店



新英文法選書 全12巻

第1巻

文法と発音

江苏工业学院图书馆
藏书章

水光雅則著

大修館書店

著者略歴

水光雅則（すいこう まさのり）

1947年　大阪府生れ

1972年　東京教育大学文学部卒業〈英語学英文学専攻〉

1974年　東京教育大学大学院修士課程修了〈英語学専攻〉

1974年～1975年　同博士課程在学

現　在　京都大学教養部助教授

〈新英文法選書 1〉

文法と発音

© M. Suiko 1985

1985年7月1日　初版発行　　定価 1600 円

検印省略

著者 水光雅則

発行者 鈴木敏夫

発行所 株式会社 大修館書店

101 東京都千代田区神田錦町 3-24

電話 東京(294)2221(大代表)振替東京 9-40504

印刷／壮光舎　製本／司製本　装幀／近藤敬三

ISBN 4-469-14210-7(全12巻)　ISBN 4-469-14211-5

Printed in Japan

はしがき

本書は，英語の発音で文法とのかかわりが深い部分を取り扱う。主たる対象者は大学の英語科の学生と中学・高校などの英語教師である。最近の英語学・言語学の成果をも踏まえて，研究・教育・学習にとって有益と思われる点を，できるだけやさしい用語で解説することを意図する。有益であればうれしい。言語理論の専門家向けではないが，統語部門と音韻部門と語形成部門の関係を考えようとする人にとっても多少は役立つように配慮したつもりである。ただし，本書の性格上，理論発展の経緯の解説，諸理論の優劣の吟味や新たな理論の可能性の追究などは表面に出さない。

第1章は「語のアクセント」である。英語の語の第1アクセントの位置は語ごとに決まっているのではなく，一般的な形で述べられる規則に支配されていることを解説する。水光（1982 a，1983）や，そのときの資料（1982 b–1982 c）を土台とするが，元を正せば Chomsky and Halle(1968) と Bolinger(1958) に全面的に依存している。

第2章は「文の句切りと強勢と音調」である。英文を発するとき，どこで句切り，どこに強勢を置き，どこで上昇調や下降調を使うのかなどについて，文の構造に基づいて決められる部分を中心に扱う。音調などについては昔から多くの研究があるにもかかわらず，どれも断片的であり，異質な要因の分解が十分になされていない。理論化の進んできた今の英語学・言語学においても，音調体系において何が原素語(primitive term, prime)で，何が被定義語（defined term）かの議論があまりされていない。よって，この章は，土台にすべき簡潔・包括的にして説得力のある枠組はないので，多くの不備を残していることを認めねばならない。ただ，句切りについては，Crystal (1975) の第1章 “Prosodic features and liguistic the-

ory" を参考にした。

第3章は「機能語の発音」である。am は I'm happy では [m] であるが，You're happier than I am. では [æm] である。助動詞，前置詞，接続詞，関係詞などは，どういうときに弱形になり，どういうときに強形になるのかについて，主として文の構造の観点から考える。これは King (1970) が取りあげてから Zwicky (1970), Baker (1971), Baker and Brame (1972), Lakoff (1970), Selkirk (1972) をはじめ，Suiko (1977, 1978, 1979, 1984 a), Hiller (1984) なども扱うようになった問題である。統語部門と音韻部門の関係の考察にとって最も大事な問題の1つである。この問題の基本的事実は Sweet 1906[4] (1890[1]), 1929[2] (1908[1]) や Ripman, D. Jones, Hultzén, Kenyon, H. E. Palmer, Pring, O'Connor, Tibbitts, MacCarthy 等々の伝統的文法書や音声記号での転写 (phonetic transcription, phonetic reader) で昔から指摘されていたものである。本書では Sweet や D. Jones などからの例文をいくつか示したが，これは先賢へのエチケットのつもりである。出典はやや古いが，今使ってもおかしくない例文である。

先賢への敬意と読者の便宜のために，考え方や例文の出所は明確にするよう心がけたが，この分野で余りにも常識になっているものについては，本書の性格と枚数制限を考慮して，出典明示を割愛したところがいくつかある。例文の正確な出典記録を失ったものもいくつかあったことを断っておかねばならない。

本書の原稿書きの色々な段階で，次の諸先生から貴重な文献を拝借したり，文献の存在を教えていただいたりしたので，心から感謝する次第である——和田章（山口大学），渡辺和幸（滋賀大学），大津由紀雄（東京学芸大学），竝木崇康（茨城大学），岡田伸夫（京都教育大学），山梨正明（京都大学），豊田昌倫（京都大学）。David Sell（京都大学），David Hale（京都大学），William Furbush（京都工芸繊維大学）の三先生には時折資料提供者 (informant) として協力していただいた。中尾俊夫（津田塾大学），宇賀治正朋（東京学芸大学）と荒木一雄（甲南大学）の三先生からは本書の前段階で励みになるお言葉をいただいたので，ここにあらためてお礼申

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

し上げる。中島是美先生には，内容の難易度，スタイル，誤字脱字にいたるまで数え切れないくらいお世話になった。深く感謝申し上げる。「新英文法選書」の編者太田朗(上智大学)，梶田優（東京学芸大学）両先生からは，内容とスタイルについて貴重な御助言をいただいた。大修館書店編集部の米山順一氏と山本茂男氏には何かとご迷惑をおかけした。皆様に深く感謝申し上げる。

本や雑誌の注文で無理を通して下さった北川俊喜氏，秋山忠英氏とその上司の方々の御理解がなかったなら文献をそろえることが十分できなかったことと思う。お礼申し上げる。校正と索引作りには，京都大学文学部学生の藤原学，橋本喜代太，高垣由美，難波功の四君から協力を得た。

本書の調査研究段階では，文部省科学研究費昭和54年度奨励研究(A)-401153 と昭和56～58年度一般研究（B）-56490011から補助金の援助を受けた。

筆者の体力・知力と時間の制限上，数々の誤りや不備が残っているかも知れない。お気付きになられた点は是非筆者に御教示お願い申し上げる次第である。

1985年5月

水光雅則

記 号

[ɪ] : sit, wit, rid.

[e] : set, said, bet.

[æ] : sat, hand, lamp.

[ʌ] : sun, cut, dull.

[ɒ] : dock, god, not.

[ʊ] : put, full, good.

[ə] : about, China, possible.

[iː] : tree, cheese, feet.

[ɑː] : calm, father, palm.

[ɔː] : bought, saw, ought.

[uː] : food, soon, loop.

[eɪ] : late, game, day.

[aɪ] : time, write, lie.

[ɔɪ] : boy, toy, noise.

[oʊ] : go, home, slope.

[aʊ] : mouth, now, sound.

[ɪər] : here, near, dear.

[ɛər] : bear, care, share.

[ʊər] : poor, sure, tour.

[əːr] : girl, word, fur.

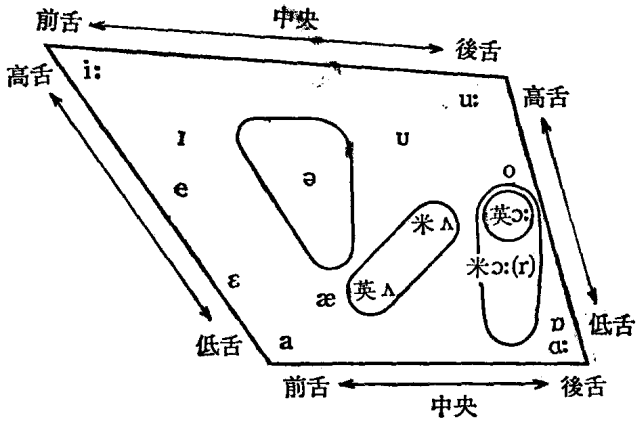
[ɑːr] : far, bark, barn.

[ɔːr] : four, fork, door.

[ər] : teacher, under, doctor.

[i] : money, lady, valley.

[i], [u], [ɑ] などは [i:], [u:], [ɑ:] などより短い音である。[æ:], [nn] などは [æ], [n] が長くなった音である。[ɪ] [æ̈] などは [ɪ], [æ] より中央化した母音である。[ə] に近づくが [ə] ほど中央ではない。



[　] は簡易表記 (broad transcription; underlying, phonological, phonemic representation) にも精密表記 (narrow transcription, phonetic representation) にも使う。上の記号は方言と例で相対的に解釈する。たとえば [ʌ] は米国方言 (General American) ではやや後舌で高舌だが，英国方言 (received pronunciation) では前舌低舌であり，[æ] に近い。money, lady, valley の語末音 [i] は，米国方言では前舌高舌の緊張母音であり，長めの [i:] のことも短めの [i] のこともあるが，英国方言ではそれよりやや中央よりでやや低い弛緩母音 [ɪ] のこともある。母音で始まる語が後続するときは英国方言でも通例 [i] である。[ɪər], [ɑ:r] などの "r" は，綴字に r があるところでは米国では発音するが，英国では母音が後続しないかぎり消える。米国の [ou] は英国では [əʊ] 等々である。発音記号の解釈は詳しく言うと切りがないので Gimson (1980[3]), Kenyon (1950[10]) や，鳥居・兼子 (1962)，太田 (1959)，小泉・牧野 (1971)，枡矢 (1976) 等々を参照のこと。子音記号は日本でなじみのものを使っており，誤解が

生じないと思うので解説は省く。

understand　個人個人の通常の声域（高い音と低い音の幅 voice range）の中くらいの高さかやや高いところから下降する音調。

understand　中より低いところからの下降調。

understand　中くらいの高さかやや高めのところからの上昇調。

understand　低いところからの上昇調。

understand　中くらいかやや高いところで平坦に伸ばした音調。

understand　下降してから上昇。

understand　上昇してから下降。

目　次

はしがき ……iii

記　　号 ……vi

第1章　語のアクセント …… 3

1.1　名詞の第1アクセントの位置／3

1.2　形容詞の第1アクセントの位置／22

1.3　動詞の第1アクセントの位置／30

1.4　独立語と接辞／37

1.5　アクセント規則の拡張とまとめ／42

1.5.1　名詞的な語と動詞的な語の第1アクセントの位置／42

1.5.2　アクセント規則のまとめ／49

1.6　アクセントの役割／55

1.6.1　母音の弱化——[ə]／55

1.6.2　x の [ks] と [gz]／56

1.6.3　[t, d, s, z] と [tʃ, dʒ, ʃ, ʒ]／57

1.6.4　[t] の弾音化——[ɾ]／58

1.6.5　音調の担い手／58

1.7　合成語アクセント／59

1.7.1　合成語／59

1.7.2　合成名詞のアクセントの位置／62

1.7.3　合成形容詞のアクセントの位置／70

1.7.4　合成動詞のアクセントの位置／72

1.7.5　3語以上の合成語のアクセントの位置／74

第2章　文の句切りと強勢と音調 ……79

2.1　文の区切り／79

2.2　文における強勢／87

2.3　文における音調／89

2.3.1　音調核の位置／89

2.3.2　下降調と上昇調の選択／95

第3章　機能語の発音 …… 105

3.1　強形と弱形／105

3.2　代名詞／109

3.3　前置詞／115

3.4　助動詞，語順，縮約，否定／129

3.4.1　助動詞／129

3.4.2　助動詞と副詞の語順／148

3.4.3　弱化形と縮約形／151

3.4.4　助動詞と not の縮約形 n't／172

3.5　限定詞／179

3.6　疑問詞と関係詞／183

3.7　接続詞／186

3.8　不定詞の to／191

3.8.1　to／191

3.8.2　want to と wanna／193

基本参考図書 …… 199

参考文献 …… 201

索　引 …… 215

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

文法と発音

第 1 章

語のアクセント

1.1 名詞の第1アクセントの位置

英語の単語の第1アクセント（以後文脈が許すかぎり単にアクセントと呼ぶ）の位置は単語ごとに決まっているのではない。規則に支配されている(rule-governed)。まず，3音節以上の名詞（1）を見よう。すべて語末から見て3番目（antepenultimate）の母音にアクセントが来ている。

（1）a. álphabet, alumínium, ánimal, ánorak, anxíety, bálcony,
3 2 1 3 2 1 3 2 1 3 2 1 3 2 1 3 2 1
begónia, billion, cápital, cárdigan, cárnival, celébrity,
3 2 1 3 2 1
centenárian, céntury, chámpion, Chrístian, christiánity, chrysánthemum, critérion, currículum, ecónomy, fámily, familiárity, electrícity, phenómenon, phenomenólogy（例外: violín）

b. bárbecue, básilisk, bílliard, élephant, émerald, éremite, fílament, gélatine, dýnamite, óbelisk

（1a）では語末が alphab*et* のように短母音1つと子音が1つか，begoni*a* のように短母音が1つであり，（1b）では barbec*ue* [bɑ:rbəkju:] のように長母音が1つか，eleph*ant* のように短母音1つと子音が2つであるという差はあるが，（1a）と（1b）は共に，（2）が示すように，後ろから2

番目の (penultimate) 母音は短母音であり，その短母音のすぐ右横の子音は多くて1つである。

(2)	álph	ab	et
	begón	i	a
	bárb	ec	ue
	él	eph	ant
	3	2	1

アクセントを受ける母音の長短は問題ではない。anxíety では [aɪ], alumínium では [ɪ] である。アクセントを受ける位置より右にある音が大事なのである。

以後の話を容易にするために，いくつかの約束ごとをしておく。綴字の単独の母音文字 a, e, i, o, u はアクセントの位置を決めるときは短母音1つに対応する。語中と語末の y も短母音扱いにする。-qu-(acquire) や -gu-(language) の u は子音 w と同じとする。ae, ai, au, ay, eu, ea, eo, ou, oi, oe, oy, oo, uy 等々母音文字2つの連鎖は長母音に対応する。アクセントを論じるときの長母音には，二重母音も含める。子音文字1つは，gh, th, ph, sh, ck と共に，単一の子音に相当する。x は2子音とする。母音を1つだけ持ち，その右に子音が0個以上並んでいるまとまりを音節と呼んでおく。音節のうち，a, e, i, o, u や ap, et, id, ot, up, og のように，短母音1つとその右に多くても子音を1つしか持たないものを弱音節 (weak syllable, light syllable) と呼ぶことにする。ebr, igr, aqu, oqu のように1つの短母音の右に子音が2つあるときは，左から2つ目の子音が r か w であるときに限ってこれも弱音節と呼ぶ。音節のうち弱音節でないものを強音節 (strong syllable, heavy syllable) と呼ぶ。ast, ipts, orl, onstr, erl, ell, ott のように子音が2つ以上あって左から2つ目の子音が r か w でないものや，aun, out, oop,

☞ fámily や familiárity のアクセントの位置は語頭から見るのか，語末から見るのか。

ou, oi, uy のように子音がいくつあろうと母音が長母音であるものが強音節である。短母音1つを $\check{V}$ で示す。長母音1つを $\bar{V}$ で示す。短母音か長母音かを区別する必要のないときはVで示す。子音1つはCで示す。子音の数がn個以上あってm個までのときは C_n^m と書く。子音の数の上限を示す必要がないときは C_n と書く。たとえば，C_2 は子音が2つ以上ならいくらあってもよいことを示す。C_1^2 は子音が1つか2つである。C_0 は子音がいくらあってもなくてもよいことを示す。C_1^1 はCと同じである。xyz と xz のように，一方にあって他方にない記号yを丸括弧( ) (parentheses)でくくり，x(y)z と表記する。C_0^1 と(C)は同じである。$x\left\{\begin{matrix}y\\z\end{matrix}\right\}w$ の波括弧(braces, curly brackets)の表記は，波括弧の中の記号yかzのどちらか1つを選ぶものとする。$x(\left\{\begin{matrix}y\\z\end{matrix}\right\})w$ は，x と w の間に何もなくてよいが，あるときはyかzに限るということを示す。すると，上述の意味での音節という単位は VC_0 と表記される。弱音節は $\check{V}C_0^1(\left\{\begin{matrix}w\\r\end{matrix}\right\})$ で，強音節は $\bar{V}C_0$ か $\check{V}C_2$(ただし，Cr, Cw を除く。以後この断り書きは省略する)である。第1アクセントを受けた母音を $\acute{V}$ で示す。後ろから，すなわち，右からn番目の母音を $\underset{n}{V}$ で示す。Elizabeth では e は $\underset{1}{V}$, a は $\underset{2}{V}$, i が $\underset{3}{V}$ である。$\underset{3\ 2\ 1}{\text{—}}$ はアクセントを受けた音節である。demándは $\text{—}\overset{\prime}{\text{—}}$, bútter は $\overset{\prime}{\text{—}}$ —，である。ここで言う音節は，母音の左にある子音を問題にしない。一般的には音節という単位は C_0VC_0 (英語の場合は $C_0^3VC_0^4$ くらい)であり，$C_0VC_0VC_0$ となった場合，音節の切れ目はどこかということが問題になるが，英語の単語のアクセントの位置を決めるときには，音節の切れ目の位置は大部分の場合問題にする必要はない。VC_0 を音節としておいて十分である。この意味の音節は，それゆえに，一般に言う音節と少し異なるので，音節と言わず，「結合」(cluster/strong cluster/weak cluster)と言うこともある。

以上の約束に従って(1)と(2)の一般性を見なおすと(3), (4)になる。

（3） 3音節以上の名詞で右から2番目の音節が弱音節なら，アクセントは右から3番目の母音に来る。すなわち，$\underset{3}{_}C_0\underset{2}{\check{V}}C_0^1(\left\{\begin{matrix}w\\r\end{matrix}\right\})\underset{1}{V}C_0]$ で終っていればダッシュの位置の母音 $\underset{3}{V}$ にアクセントが来る（…] はそれで語が終っていることを示すものとする）。

（4）

		弱音節	音　節
	$_C_0$	$\check{V}C_0^1$	VC_0
	alph	ab	et
beg	on	i	a
b	arb	ec	ue
	el	eph	ant
	3	2	1

音節の位置・種類を語頭から見たのでは一般性は得られない。語末から見て初めて一般性が得られる。

barbecue, dynamite の末尾の e は，後ろから何番目の母音かと言うときに勘定に入れない。現代英語の末尾の e はそのすぐ左の母音が長母音（前述のように二重母音を含むものと解釈する）になるという合図である。(5a) のように e のすぐ左に子音が1つあるときや，すぐ左に子音がない (5b) や，e のすぐ右に r とすぐ左に子音が1つある (5c)，e のすぐ左に l と何か子音がある (5d) のときに母音が長母音になる。a, e, i, o, u はそれぞれ [eɪ, iː, aɪ, oʊ, juː] であり，アルファベットの発音と同じになる。

（5）a. $\bar{V}Ce]$: dāte, lāte, fāte, fāme, lāme, safe, tame, profane, humane, mundane, like, bike, fine, time, mine, nine, line, wine, Pike, decide, devide, complete, serene, use, cute, excuse, home, dome, pole, devote, note,

☞ **barbecue や dynamite の語末の e は発音上何を合図するのか。**

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com